都道府県番号	３２
都道府県名	島根県

① □　② □　③ ■

Ⅰ．学校名及び規模

斐川町立西野小学校										
	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数	
学級数	3	3	3	3	3	3	1	19	２８	
児童数	94	108	93	106	111	113	2	627		

Ⅱ．実践研究の概要

・主題（テーマ）

「豊かな心をもち，よりよく生きようとする子どもを育てる」

・　テーマ設定の趣旨

（１）本年度から全面実施となった新学習指導要領では，基礎・基本を確実に身に付け，それを基に自分で課題を見付け，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力，豊かな人間性，健康と体力などの「生きる力」を育成することを基本的なねらいとしている。

これからの社会は，国際化，情報化，環境問題の深刻化，高齢化・少子化など様々な面でこれまで以上に激しい変化に直面することになると予想される。そのような中で，これからの社会を担う子どもたちが主体的，創造的に生きていくためには，一人一人の子どもが「確かな学力」を身に付け，生活の中で起こる様々な事象を関心をもって見つめ，自分で判断し，自分の意志で行動しながら，より望ましい生活を切り開いていく力が求められていると考える。

（２）　本校の児童の実態とこれまでの研究の経過から

明るく素直な子どもたちであり，友達とも和やかに活動できる。そして，学習の場では，教師の働きかけに対して意欲的に取り組もうとする。しかし，その反面，教師の指示に頼りがちであったり，失敗を避けようとしたりする受け身の姿勢や自信のない態度がうかがえる。

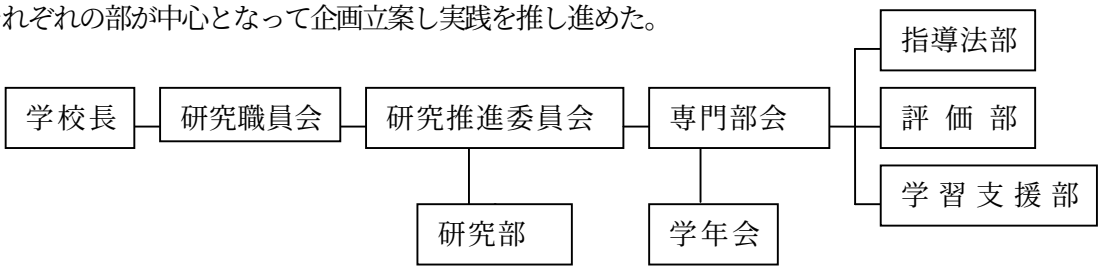
そこで，平成１１年度から生活科と総合的な学習の時間を中心に，「子どもが求め追求する学習」をテーマに，子どもの求めを大切にした体験的・問題解決的な学習の研究実践に取り組んできた。実践を積み重ねる中で，自らの求めを実現するために，見通しをもちながら主体的に学習活動に取り組もうとする姿がだんだんと見られるようになってきた。

平成１４年度から３か年にわたって「学力向上フロンティアスクール」として文部科学省及び島根教育委員会の指定を受けることになった。これまでの研究成果を基盤に，児童一人一人の「確かな学力」の向上をめざして，個に応じたきめ細かな指導の充実を図っていくことで「豊かな心をもち，よりよく生きようとする子ども」を育てていきたいと考え，本主題を設定した。

Ⅲ．実践研究の内容について

（ｉ）研究体制の工夫

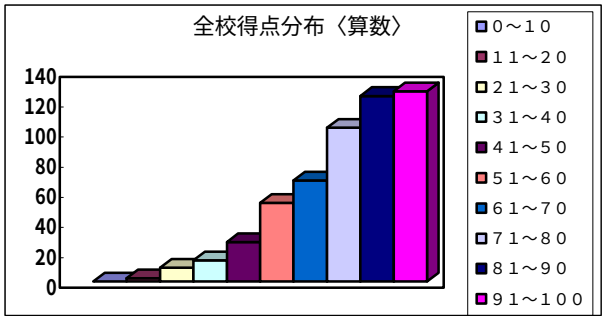
子どもに身に付させる「確かな学力」については，これまでの研究を基盤に本校の「めざす子ども像」に照らし合わせながら研究職員会や研究通信などで共通理解を図るよう努めた。そして，確かな学力の向上に向け全校体制できめ細かな指導に取り組むために，指導法部・評価部・学習支援部の３つの部を設置し，それぞれの部が中心となって企画立案し実践を推し進めた。



（ⅱ）実践研究の内容　　～算数科～

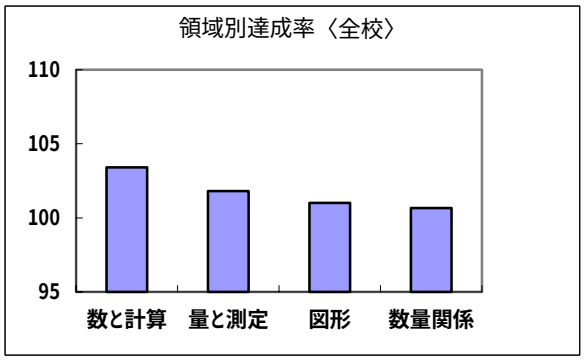
○　学力検査の実施による学力の状況の把握及びそれに基づく指導法の改善

年２回，第２学年から第６学年まで(第２回は１学年も)を対象に目標基準準拠検査（ＣＲＴ）を実施した。この検査を実施したことにより，前学年までの個人の到達度と学年及び全校としての傾向を把握することができた。多くの児童がおおむね算数の基礎・基本を身に付けていると判定でき(資料1)，領域別でも全体的に到達状況はよかった(資料２)。しかし，各領域を学年ごとに見てみると「量と測定」領域において４年生だけが極端に低く（資料３），前学年の「重さ」単元で，はかりを使って計測する活動経験が不足し，目盛りの読み方を十分に習得できていないことがつまずきに影響していることがわかった。



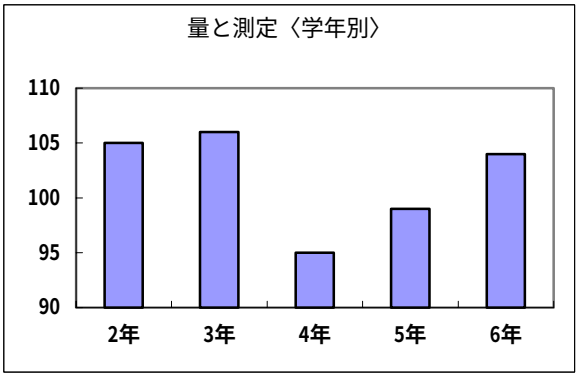
（資料２）

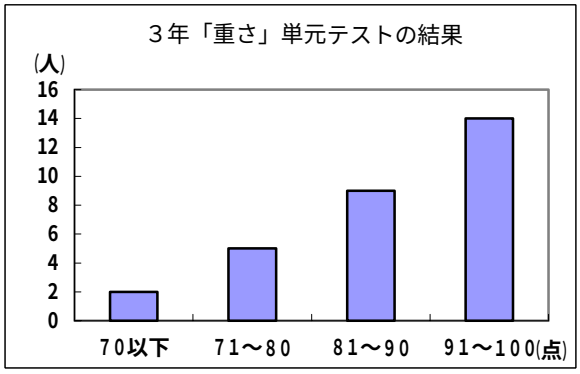
そこで今年度の３年生の学習では，身近な物の重さを計測する活動を多く取り入れたり，日常生活で重さを計測する場面を考える活動を取り入れたりして，子どもたちが「重さをはかる」ことへの必要性がもてるような学習計画を立てた。総合的な学習の時間で取り組んでいる「キャベツでわくわく友達の輪」を学習計画の中心に据え，キャベツの収穫，調理，販売など日常生活と算数の授業とを結びつけることを試みた。



（資料４）

その結果,「重さ」単元終了後のテストでは，多くの児童が高得点を取ることができ，大きくつまずく児童も見られなかった（資料４）。また，児童がつまずきやすい目盛りの読みとり問題でも，全体的に高い正答率であった。ＣＲＴから導き出されたデータを分析し児童のつまずきやすい部分を探り，その克服法を考えて実践した結果の表れと言える。　　（資料３）





○　指導内容の着実な定着を図るための診断的評価及び形成的評価

ア　診断的評価について

新しい単元に入る前や，コース別学習に入る前に教師や子ども自身が現在の学習状況を把握し目標を達成するのに必要な学習計画を立てるために診断的評価を行った。

ａ　*前学年の類似単元の問題*（単元に入る前に実施）

小学校ではそれぞれの学年でらせん的に教材の内容が配列されているので予備調査として前学年の類似単元の問題をテストした。

ｂ　*単元の問題*（単元に入る前に実施）

新指導要領の移行措置で過去の学習と同じ内容を繰り返しているものや，初めて出た内容でも解けそうなものについては指導の軽重をつけてよいかどうか確認するために行った。学習内容がほぼ身に付いていると判断された場合は時間をあまりかけず，朝のスキルタイムなどで定着を図ることとし，難しい内容に十分時間をかけて指導することにした。

ｃ　単元において難度の高い問題（コース別学習に入る前）

一斉指導で単元の基礎となる学習をした後，習熟度別指導におけるコース選択を行う際に用いた。子どもにとって学習の見通しがつきコース選択のめやすになると共に,教師がアドバイスをするのに役立った。

イ　形成的評価について

子どもの学習過程においてステップ毎の細分化された目標を確認するために次のような方法を用いて形成的評価を行った。

ａ　小テスト

一斉指導の後，ステップの指導のねらいに応じ，小テストとして同程度の難易度の問題やチャレンジ問題に取り組ませた。解き方を発表し合ってみんなで学習内容を確認したり，子どもの解答状況を見て支援の方法を考え直したりした。

ｂ　自己評価カード

児童の自己評価力を高め自分に合った学習コースを選択したり次の課題を見つけたりできるようにすると共に，児童の理解の程度や思いを見取って指導に役立てていくために，授業終了時に学習を振り返り自己評価する時間を設けた。めあてをもって学習する児童の姿が見られると同時に，本時の指導法を振り返ったり次時の学習支援を考えたりする際の材料として有効に活用できた。

ｃ　ノート及びワークシート

授業後に提出されたノートおよびワークシートを見て，学習内容が理解されているかどうか調べたり，一人一人のつまずきや工夫の跡を見つけたりした。

ｄ　観察

TT 指導の際，Ｔ１が全体指導を行い，Ｔ２が子どもの様子を見取り記録していった。Ｔ２はステップの目標に照らして，発言内容，学習意欲，学習のつまずきなどを記録し必要に応じてＴ１に報告したり，個別指導を行ったりした。

(iii) 成果と課題

○　既習事項の定着度をプレテストにより把握したり，年度当初に学力検査(ＣＲＴ)及び意識調査を実施したりすることによって，児童の学力の状況や意識について多面的に把握することができた。その結果，指導に重点をおく学習内容が明らかになり，児童の実態に即した指導計画や指導方法を考え工夫改善したことで一部領域において学力の向上が見られた。

○　ワークシートや自己評価カードの活用などによる形成的評価を実施することで，子ども自身が小単元や一時間の目標を達成できたかどうかを客観的に判断できるようになってきた。そして，自己評価カードを基に自らの求めを実現できる学習コースを自己決定しながら学習を進める姿勢ができつつある。しかし，自己評価には時間的なゆとりが必要なため，効率よく継続して活用できるような評価カードになるよう改良を加えていく必要がある。

○　観察による方法は，机間を巡る際，子どもにとって学習の妨げになることがあるため，観察する項目を絞って評価していく必要がある。一単位時間ごとに作成している「指導の流れ」に評価の欄を加えたり学年での話し合いで評価の方法などについて十分協議したりして，計画的できめ細かな評価をしていく必要がある。

○　過去数年間の TT 指導の成果もあり，年度当初の目標基準準拠検査（ＣＲＴ）の結果から基礎的・基本的な内容についてはおおむね到達している状態であると判定できた。今後は，自ら学び自ら考える力が育ち確かな学力が育成されているかどうかを集団基準準拠検査（ＮＲＴ）を利用するなどして多面的に把握し，指導方法・指導体制を改善していく必要がある。

(iv) 成果の普及方法

○　地区協議会にて授業を公開し，地域の学校にも参加を呼びかけ情報を公開した。また，ホームページを開設し実践内容を公開した。

（ｖ）その他

○　数年来取り組んできた朝読書の時間を毎週火・木・金の１０分間拡大実施することにより，日常的な読書活動を推進した。